

情報社会と情報化能力

石 川 公 弘

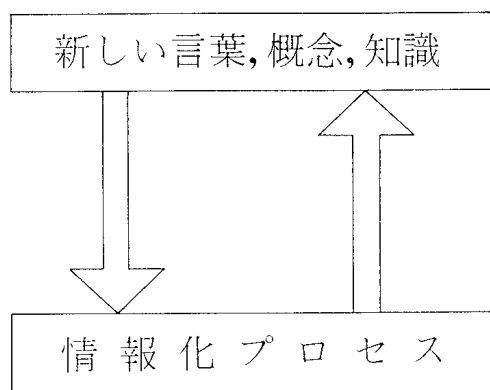
一、情報社会に必要な能力は何か

(1) 情報社会とは 情報社会という言葉がある。いろいろと解釈されるが、それは、(一)工業化社会のあとに来る社会、(二)優れたコンピュータの出現により、情報処理のスピードが信じられないほど速くなった便利な社会、(三)人間および組織と、情報のつながりがたいへん重要になり、情報の生産とか創造に高い価値を与える社会、(四)知識産業の占める比重がきわめて大きな社会、と性格づけられるであろう。

このような情報社会において、そこに生きる人間には、如何なる能力が必要とされるかを考えるのが、本稿のネライである。そこで、まず情報の定義から始めてみたい。「情報」、これも解釈はいろいろあるが、ここでは「人間や組織が行動するために必要な知らせ、あるいは、人間や組織が行動するに当って、不確かなものをより確かなものとする知らせ」と規定しておく。

情報の重要性への認識は、今日、突然にはじまったものではない。戦国時代、今川義元を桶狭間に破って天下統一のきっかけをつかんだ織田信長も、その第一の論功を、今川勢の情報をもたらしたものに与えたし、日露戦争の勝利を不動のものとした日本海海戦も、バルチック艦隊の針路を正確にとらえた、きめ細かい情報戦の勝利であった。また、現代の企業経営でも、情報の重要性はよく認識されている。

情報化能力 要素間の相互作用



それなのに、なぜ更めて情報社会なのか。それはなによりも、社会のあらゆる人間行動の場で、情報の量とその価値が、爆発的に増大しているからである。たとえば、今日の交通機関をみても、ジェット機や自動車、新幹線など、機械そのものの価値もさることながら、それを支えるソフトの価値の方がはるかに大きいのである。この場合、ソフトの価値とは殆んど情報の価値なのである。

(2) 新しい社会に必要な能力とは

情報社会を生きる人間には、新しい社会に適應するための新しい能力が必要とされる。それは「情報化能力」とでも言えるものである。その内容がいかなるものであるかについては、今後、十分に検討されなくてはならないが、それは二つの側面をもつだろうと考えられる。その一つは、新しい社会を考え表現するための、新しい言葉や概念、知識や理論をもつことであり、二つは、新しい言葉や知識を用いて、より価値のある情報を生みだすための、次に述べるような「情報化プロセス」を把握することである。またこの二つの要素は、

左図のような相互作用をもつのである。それと言うのも、情報化プロセスを十分に機能させるためには、新しい言葉や知識が必要であり、一方、情報化プロセスの働きから、新しい言葉や情報、知識、ひいては理論も生れてくるからである。

(A) 新しい言葉や概念 情報社会は、これまでの工業化社会とは別種の社会であり、私たちはこの社会を理解するための新しい言葉や概念を必要とする。機械や道具に耐用年数があるように、社会で用いる概念や用語にも、使用に耐えうる耐用年数がある。社会の構造的変化が進む時代には、かつて有効であった概念や用語が急速に陳腐化し、言葉も耐用年数を終えていくのである。

例えば、資本主義の勃興期には、カール・マルクスの指摘したような「資本の搾取」はよく見られた現象であったかも知れないし、社会を表現するわかりやすい概念であったかも知れない。ケインズの経済分析も、経済不況克服のための金融財政政策も、その時代の課題を説明する理論としては、きわめて適切なものであったろう。大量生産、大量消費の工業化社会においては、「消費は美德、使い捨て」という概念も、まことにふさわしいものであった。

しかし、こうした概念は、すでに今日の社会を理解するのに適したものではなくなりつつある。今、私たちは、現代の社会を読みとるために、また現代の社会を表現するために、新しい言葉や概念を必要とし、また新しい言葉や概念によって構築された新しい知識や情報、理論を必要としているのである。なお、この課題は別の稿で更けて詳細に論じてみたい。

(B)情報化プロセスの修得 情報化能力の一つの側面に、情報化プロセスの把握とその活用がある。これは修得可能な能力であり、十分な訓練によってしっかりと把握され、日常的に活用されるべきものである。「情報化プロセス」は、次図のように示すことができる。

本稿は、これら情報化プロセスを、順次、説明しながら、情報化能力の一つの側面について考察していきたい。

二、情報需要の明確化

(1) 情報ルート断絶の悲劇 情報化プロセスは、まずどんな情報が必要とされているかという情報需要の明確化からスタートする。最近、製品の欠陥によって死亡事故をおこした会社がある。社長がそれを知ったのは、おどろくべきことに事故の発生してからだいたい日時の経過した時点で、しかも新聞紙上であったということである。この経営者は、二重の意味で責任を感じて辞職した。一つは自社の製品が死者まで出してしまったことへの責任、二つは、そんな重要な情報が社内から報告されず、誰一人それについて知らせる者がなかったという組織内情報ルートの断絶状

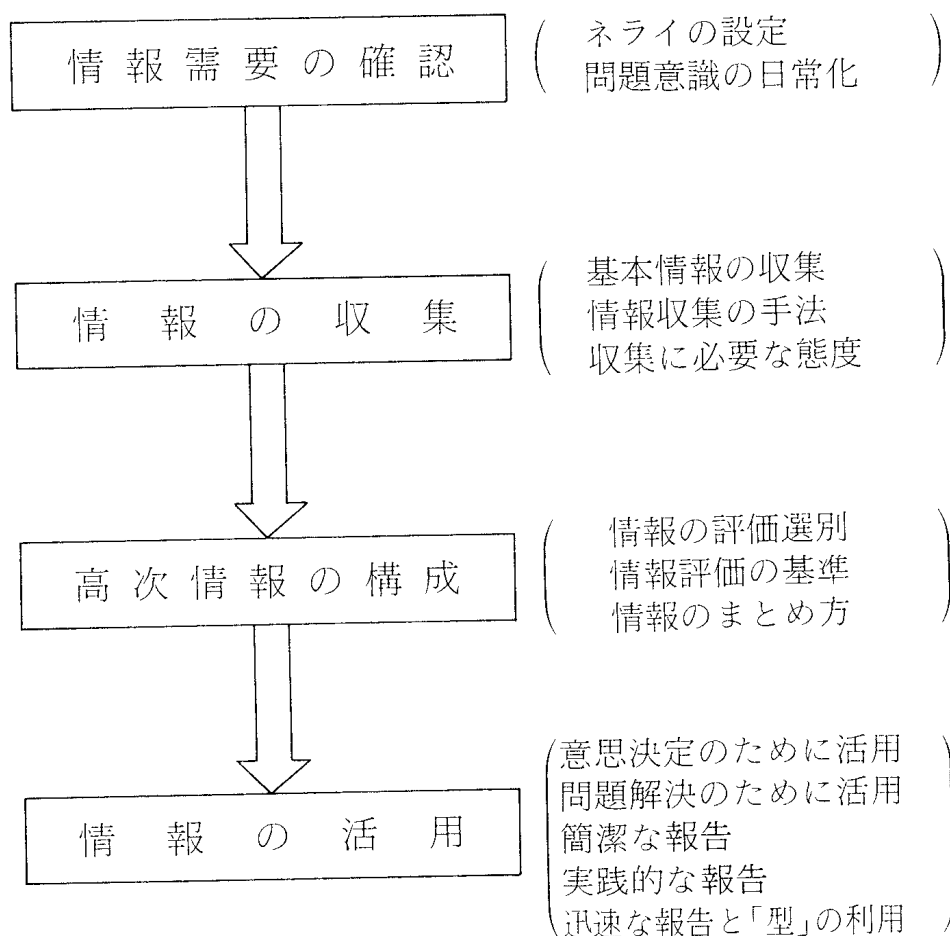
態についてである。

重要な情報が、当然知らされねばならない
トップ・マネジメントの耳に入らない、ある
いは大巾に遅れて入るといふ例は、非常に多
い。それは、日常の組織内コミュニケーション
の状態を示すものである。日ごろからパイ
プの流れの悪い組織では、都合の悪い情報は
完全につまってしまう。良い情報でも、悪い
情報でも、必要とされるものは、必ずトップ
や関係者のところへ、迅速かつ正確に達する
ような仕組みこそ確立されねばならない。

(2) トップの情報関心を明示する その

ためには、トップはつねに、情報について深
い理解と関心をもち、組織内に情報要求とし
て明示しておかなくてはならない。そうして
おけば、適切な情報がタイミングよく流れて
くるのである。どんな組織でも、トップが重
大な意思決定をなすときは、不確実な要素が
きわめて多く、頼れるのは自分だけとなる場

情報化プロセス



合が多い。そのとき、判断の基礎となるのは、日ごろ蓄積してきた情報である。

トップが情報上の関心を明確にしておく、周囲の者は、何を知らせるべきか、また何を知っておいてもらいたいかを判断できる。それがないと、大切な情報が流れなかったり、逆に何から何まで報告されて、トップを情報洪水の渦の中におとし入れてしまうことになる。

(3) **問題意識の日常化** 情報需要が明確になったら、それに対する強い問題意識を、日常化することである。関心のあるところへ情報は集まるものであり、問題意識のあるところへ、情報は自ら飛び込んでくる。例えば、何か特定の問題意識をいだいているときは、新聞などを読んでいても、それに関する情報がまず目につくことなどは、私たちのよく経験するところである。

三、情報の収集

(1) **基本情報の収集** 情報収集のネライが明確になったら、次は具体的に情報を収集することになる。そこでまず必要なことは、絶対に欠かせない基本的な情報の収集である。その場合、次のような情報を基本情報と考えることができる。

(A) 基本中の基本、六何情報 情報の中で基本中の基本といえるものが、六何情報、すなわち5W1Hに関する情報である。だれが(Who)、いつ(When)、どこで(Where)、何をした(What)、何故した(Why)、いかにした(How)、かについての情報であり、新聞記者が記事を書くときも、必須の要件としているものである。ビジネスの分野では、これらに、対象(Whom)、金額(How much)、数量(How many)、の1W2Hを加えて、6W3Hにすべきだとする考えもあり、そうなるとう九何情報といえるであろう。

(B) **時間情報** ものごとの経過を時間的にとらえる情報である。過去はどうだったか、現在はどうか、将来の見

通しはどうかについての情報であり、よくこうした視点からの情報の収集整理を、YTT整理と呼ぶことがある。これは昨日 (yesterday)、今日 (Today)、明日 (Tomorrow) の頭文字をとった呼び名である。歴史が私たちに対して、偉大な教師の役割をするというのは、この時間情報がきちつと整理されているからである。

(C) 比較情報 「比較はチエの始まり」という言葉がある。私たち人間は、比較することによって多くのものを学ぶのである。企業体においては他企業との比較、他産業との比較、自治体などにおいては他県、他市町村と比較してみる。とくに先進企業、先進都市など優れたものとの比較は有益である。国際化時代の今日、国際比較も不可欠の情報であり、日本人ならびにわが国企業組織の、普遍性と特殊性を知る手がかりになる。

(D) 原理情報 これは組織や人間の本来あるべき姿についての情報である。例えば、人間にとって健康とはどういう状態かという情報である。山城章一橋大名誉教授は、その実践経営論の中で、およそ次のように述べられている。「優れた経営活動のなかから、経営のあるべき原理をさぐり、一方、経営の実際や現実をよく理解して、原理を実際の改善のために、指針として活用する。この原理活用能力こそ、経営者、管理者に期待されるリーダーシップである。」⁽¹⁾

行動の指針として、私たちは原理を知らなくてはならない。一流の組織や人物の周辺には、必ずその一流であることを支えている「やり方」についての情報がある。人間の健康状態とはいかなるものかについての情報も、優れて健康な人たちの集団のなかから、はじめて抽出することができるのである。

(E) 実態情報 これは、実態とか実際とか、あるいは「現実」とかいわれるものについての情報である。私たちが病気で入院すると、医師はめん密な検査をする。それは、病人の実態に対する正確な診断なくしては、適切な治療は行えないからである。健康状態と、病んでいる実態とのズレが病気であり、「問題」である。そのズレがなくなつたとき「問題」は解消し、病気はなおる。

それと同様に、組織にもつねに「問題」が発生する。こうあって欲しいとする原理としての組織と、現実の組織の実態とのズレが、組織上の「問題」⁽²⁾であり、私たちはこの問題のズレの原因を、一つ一つ解消することによって、「問題」を解決することができるのである。その意味で、原理情報と実態情報は、「問題解決」のために不可欠の情報といえるのである。

(2) 情報収集の手法 次に情報収集に当って、どのような手法があるかを考えてみたい。

(A) 手法としての「メモ」の効用 手法として最も普通に使われるのが「メモ」である。メモとは、紙の上に、できるだけ短い言葉で情報を書きとめることであり、古くして新しい代表的な情報収集の手法である。情報をメモしておく、次のような効用を期待することができる。

- (イ) 頭の中の記憶が記録になり、情報を正確に保存できる。
- (ロ) 記録しておく、それを使って効率的に考えることができる。
- (ハ) 情報の脱落や重複をチェックすることができる。
- (ニ) 何が重要な情報で、何が不必要な情報かをチェックすることができる。
- (ホ) 情報の分類、整理が可能になる。
- (ヘ) 新しい発想のヒントを得やすい。

(B) 各種機器の利用 情報収集に当って、最近ではテープ・レコーダー、ビデオ、ワープロ、パソコン、ファクシミリなど多くの便利な機器が出現し、それを利用できるようになった。ワープロのフロッピーには、きわめて多くの情報資料を保存することができるばかりか、取り出すことも比較的簡単で、非常に役立っし、ファクシミリも遠くから即座に情報を送ってもらうことができ、便利である。

電話も使いようによつてはたいへん役に立つ。それぞれのテーマの専門家に、即座に直接、話を聞くことができる

からである。宮沢喜一大蔵大臣は、「ダイヤルフレンド」といって、つねにあらゆる分野の専門家をネットワークしておき、必要の都度、電話で情報を収集することである。

(C) 質問票方式 情報収集の対象が人間である場合、質問票方式はとくに有効な方法である。それぞれの分野に人脈をもっていて、そのテーマは誰に聞けば良いかが判ると、情報収集はムダがなく、効率をあげることができる。この場合に必要なのは、相手に何をどのように聴こうとするのか、十分な下準備をしておくことである。そうしないと、時間の浪費になり、相手には失礼になる。質問票方式はこうした問題を防いでくれる。十分な問題意識をもってつくられた質問票を二部用意し、一部を事前に相手へ渡しておいて、その順序に従い質問していくと、充実した情報収集が行えるのである。聴く側も、答える側も、十分な準備がなされるからである。

(3) 情報収集に必要な態度について 次に情報収集にあたって、私たちのとるべき態度について考えてみたい。

(A) 現実を直視する柔軟な思考 「教条主義的」とよく言われるが、自分の考え方の枠組みが強すぎて、その枠組みに合致したことだけ、自分の考えにマッチしたもののだけ収集するやり方では、真実の情報を収集することはできない。とくに今日のように社会が構造的変化を見せているとき、過去の延長線上に現在はなく、現在が変らずに将来へ持続する保証はない。こうした現実には、虚心に柔軟に対応することが、なによりも必要な情報収集への態度であろう。

(B) 貧欲な情報収集への取組み 情報収集には、あらゆるチャンスを活用する貧欲なばかりの意欲を必要とする。そして、強烈な問題意識を日常化しなければならない。行き交う人々の服装も、強い問題意識を通して見ると、多くの有益な情報収集の源泉となる。

(C) 相互信頼と互惠的態度 人間を相手の情報収集には、相手の信頼がえられなければ、正確で核心をついた情報は収集できない。また情報は、相手から得るばかりでなく、こちらも相手のために情報を提供する、いわゆるギブ・

アンド・テーク的考え方が必要である。なにごとともそうであるが、相手に一方的に求めてばかりいる関係は、永続しないものである。

四、高次情報の構成

(1) 情報の評価 必要な情報は、いろいろな角度から集められなければならない。またできるだけ多く集められなければならない。価値のある情報を集めるには、ある程度の量の情報が必要である。

集めた情報は、次に評価・選別される。情報といえば評価と答えるほど、情報における評価は大切なことである。とくに情報社会と呼ばれる今日の社会は、種々雑多な情報に満ち溢れている。その中から、真に必要なとする情報を収集し、不要なものを捨て去るには、評価と選別が、一定の基準に立ってきびしく行われなければならない。そうしないと、私たちは情報洪水のなかで方向を見失ってしまうからである。

(2) 情報評価の基準 情報を収集する時点で、あるいは情報を収集してからそれを整理する時点で、私たちは情報を評価、選別する。選別に当っては一定の基準がなければならない。価値ある情報、残しておいて活用する情報と、逆に捨て去る情報とを区別する基準は何であろうか。

(A) 有用な情報か 情報は役に立つから情報といえるのである。情報は必要とする者には価値を生ずるが、必要としない者には、一文の価値もない。不必要な情報は、いくらあっても価値を生まない。有用性はその意味で大切な基準である。また、有用な情報でも、現時点で有用なのか、将来、有用になるのか、全部が有用なのか、一部が有用なのかも検討されねばならない。

(B) 正確な情報か 情報はなによりも正確でなければならない。誤った情報に基づいて行動した結果、大きな間違いを惹きおこしてしまった例は、古今東西を問わず、数限りない。それは確実に事実なのか。そのようなことが実際

にありうるのか。言葉が、その事実を正確に表現しているかもチェックしたい。言葉が、実態とかけ離れて、虚像をつくり出すことに注意しなくてはならない。

(C) 新鮮な情報か 情報にも鮮度がある。殆んど情報は、時間の経過とともに新鮮さを失っていく。とくに変化の激しい時期の情報は陳腐化が早い。例えば、欧米の自動車市場についての情報は、経済摩擦が激化し急速な円高の進行した時点の、以前と以後とは大きく変っている。一方、あまり変化のない時期の情報や、地形や気候など半恒久的ともいえる情報は、時間が経過してもあまり新鮮さを失わないのである。

(D) タイミングの良い情報か 情報評価の大切な基準にタイミングがある。タイミングのズレた情報は、ビジネスはもちろん多くの人間行動の分野で、重大な結果を招くのである。大変事の起きそうなき、なにはともあれ、「大変だ、とんでもないことが起きそうだ」という緊急連絡は、タイミングのズレた正確な事後報告よりも、多くの場合、価値が高い。「拙速」が尊ばれるわけで、正確さは、第二報、第三報で補っていけば良いのである。

(3) 情報のまとめ方 多くの情報が集められ、まとめられて、より高次の新しい情報が創り出される。情報から情報が生み出されるのであり、組織的に見ると、階層を上へ登るほど高次元の情報を創り出す機会が多い。だが、情報をまとめるのは、そう簡単なことではない。高次情報をまとめる場合、素材となる情報が無いのも困るが、たくさんありすぎても、まとめるのはそれだけ難しくなる。これはちやうど、多くの人から意見が出されたときに、それをまとめる苦勞に似ているかも知れない。では情報をまとめるには、どのようにしたら良いだろうか。

(A) 情報メモを一面に拡げてみる それにはまず、集めた情報メモを、紙の上でも床の上でもよいから一面に拡げてみることである。多くの情報を、一覧できるように拡げるのである。何故そのようなことをするのか。その理由は、次のように説明できる。私たちの記憶は、何やら仕組みのわからないブラック・ボックスのなかにある。その中に多くの情報が詰め込まれている。しかし、詰め込んでおくだけでは、より高次の情報を構成することはできない。それ

はちょうど、暗闇の中で、手探りで探しものをするのと同じであり、能率的とは言えない。

手持ちの情報を一面に拡げること、私たちは暗闇に光をあて、どこに、どんな情報が、どれだけあるかを知ることが出来る。これは、暗算ではなかなか正確に計算できないのに、筆算なら確実にできるのと、同じ理屈である。

(B) 拡げた情報を分類する 情報はいくら大量に収集されても、分類、整理され、体系化されなくては意味をもたない。そのため、一面に拡げた情報のなかから次に、似た情報、共通性のあるものを、ひとまとめにする作業をするのである。何と何が共通で、何と何が違うかなど、分類するのが、情報を認識する基礎である。

(C) 情報構成のパターンを見つける 次に分類した情報メモのグループとグループの間に、何か関係がないかを考えてみる。関係があれば、その間を線で結び、その関係がどういう関係かを考えるのである。朝日新聞の白井健作氏は、この作業を「メモと配線図」と呼んでいる。集めた情報を一覧しながら、分類し、ああでもない、こうでもない、と相互の関係を考えていると、人間の頭とは素晴らしいもので、それぞれの関連づけが自然に出来てきて、いつのまにかスカットした配置にたどりつくものである。そしてその関係は多くの場合、次のようなパターンになると言えるであらう。

- ① 目的と手段の関係
- ② 原因と結果の関係
- ③ 前提と帰結の関係
- ④ 原理と実際の関係
- ⑤ 時間的順序の関係
- ⑥ 一般と特殊の関係
- ⑦ 全体と部分の関係

⑧主要事項と付加的事項の関係

⑨重要度の関係

⑩難易度の関係

⑪その他

五、情報の活用

(1) 意思決定と情報 以上のような経過で、情報は構成されるのであるが、情報は、組織あるいは個人の情報需要に適合したもの、組織の意思決定や問題解決のために役立つものでなければならない。「意思決定」とは、経営レベルのものであり、組織体の構造に変化をもたらすような課題に対して、組織の意思を決めることである。「問題解決」とは、これに対して管理レベルのものであり、組織運営ののぞましい「あり方」と、「現実」との間に生ずるズレを解消するための活動と解釈できる。しかし意思決定にしろ、問題解決にしろ、両者に共通するのは、組織の内外からの情報がなければ、それを行えないということである。例えば、意思決定には将来の予測が不可欠であるが、その予測に当たっても情報は絶対に必要であり、また、商品開発のアイデアは、何らかの情報に触発されて出てくる場合が多いのである。

(2) 「報告」と簡潔性 組織内での報告は、情報活用の一種であり、組織のメンバーにとって、最高の知的生産活動である。その際、必要なことは、個人的情報も死蔵せず、どんどん組織のために提供する姿勢であらう。トップ・マネジメントは、重要な意思決定をはじめ、あらゆることに決断を下さなくてはならないので、常に正確で適切な情報を求めている。この情報需要に応えるのが、報告する立場にある部下の役割である。適切な報告をまめに行えば、上司と部下との信頼関係はゆるぎないものとなる。

トップ・マネジメントは、正確な情報を求めているが、いずれも忙しい人たちであるため、報告に「簡潔さ」を求めるのが普通である。トップには組織の内外から、いろいろ問題が提起され、次々とそれを解決していかねばならない。内容も広範囲にわたり、それを限られた時間の中で、次々と決断していかねばならないからである。

多くの場合、組織内外の情報は文書によって伝えられる。文書は、「情報の入れ物」といわれる。文書が入れ物で、中味が情報である。このことを端的に示すのが、レーガンメモといわれるものである。レーガン米大統領は、長文の報告書はまず読まないという。どんな複雑な背景のある事柄でも、必ずタイプ用紙一枚に収めさせる。そして、そのメモは、次の四項目から構成され

レーガンメモの構成

テーマ

- (1) 問題点
- (2) 事実関係
- (3) 分析
- (4) 結論または勧告

ている。⁽³⁾

全文を一枚以内でまとめるとなると、各項目は、わずか数行のスペースしかない。大統領に報告するほどの事案だから、どれも書物一冊くらいの情報が詰まっているはずである。そのため、「メモ」をまとめるスタッフは、この小さな「入れ物」に膨大な情報をどう手際よく入れるかについて、日夜、苦心しているというのである。

一九四〇年、ヒットラーのドイツに攻撃され、滅亡の危機に直面した英国で、首相の座についたウィンストン・チャーチル卿が、まず行つたものも、政府各部局の長に対する、次のような指示であつた。⁽⁴⁾「われわれは職務を遂行するため、大量の書類を読まなくてはならない。それらの書類のほとんどが、長すぎる。時間はムダだし、要点を見つめるのに手間がかかる。同僚諸兄と部下の方々に、報告書をもっと短くするようにご配慮願いたい」。

このように、二人の歴史に残る最高指導者が、ともに簡潔なメモを要求している事実は、組織のトップ・マネジメントへの情報伝達のあり方を示していると考えられる。正確さを求めることと、簡潔に表現するということは、ときに矛盾する。長い報告、必ずしも正確とはいえないが、短い言葉では、どうしてもいい盡くせないこともある。この矛盾するものを同時に満足させるのが、トップへの報告義務をもつ者の、大きな課題といえる。情報を正確に、しかも簡潔に伝えていく能力が必要とされるのである。

(3) **報告と「実践性」** いかにな適切な情報構成も、活用されなくては意味がない。そのため、報告にも、すぐれた実践性を要求される。よく報告に、報告者の判断を加えるべきかどうかが論議される。報告は事実だけに限定し、その判断はトップや上司にまかせるべきだとする考えである。たしかにアメリカのケネディ元大統領などは、大部の事実に向つて自ら分析し、対策を立てることを好んだといわれるが、それはやはり、若さと行動力を売り物にする人だからできたことであろう。トップのもつ一日の時間も、あらゆる人と平等で、二十四時間しかない。そういう意味からすると、情報の収集、整理、構成のプロセスにおいても、またその結果を報告するに当たっても、事実の確認、分

析にとどまらず、好ましいことか否かの「評価」、解決のための「対策」まで報告のなかへ含めた方が良い、といえるのではないだろうか。もちろんこの場合でも、事実と意見とは明確に区分して置くことは、いうまでもない。

この四つの要素、即ち、「事実の確認」、⁽⁵⁾「分析」、「評価」、「対策」、が含まれた報告はきわめて実践性の高いものとなる。先に述べたレーガン・メモも、殆んどこの要求を満している。単なる事実の報告書より、その事実を分析し、評価し、さらにその対策まで考える報告をつくることで、私たちの情報化能力は、一段とレベルアップがはかられるのである。

(4) 文書の「型」を活用する利点

型や形式というと、反射的に固くるしいと考える人が多い。しかし私たちの生活は、朝夕の挨拶から始まって、最小限の約束事があるから円滑に営まれるのである。毎日くり返される営みの中に、私たちは一定の「型」をみつけ、手際よく処理している。よく面目丸潰れの事態を、「型なしだ」というが、これも生活の中で基本的な「型」がいかに大切か、またそれが失われた場合に、いかに恥しいものであるかを示している。

文書にも利用すべき「型」があり、それを利用すれば、楽につくることができ、情報の構成や伝達に当って、重要な部分が欠落することなく便利である。限られた時間内に、効率よく意思の表明や情報の伝達をするためには、文書の「型」を活用すべきである。「簡潔な」、「実践的」な報告をつくるためにも、一定の枠組みをもった「文型」を前もって準備し、それを活用していくのが良いであろう。会社によっては営業報告書などに、そうした枠組みを設定しているところがある。こうしておけば報告書も報告しやすいし、それに応じた問題意識を日常化することによって、情報の収集、構成も適時、適切に行われるのである。

六、情報化能力の今日的課題

今日の社会は、私たちのこれまで経験したことのない速さで、大きく変りつつある。この社会に適應するための情

報化能力の一側面について、これまで論じてきたのであるが、とくに当面の課題として、次のような点に注目しなければならぬと思う。

(1) 目に見えない考え方の変化をつかむ

今日の社会を理解することの難しさは、社会が変革期にあるため、しばしば歴史の非連続性といえるような面に出づかることである。例えば、私たちの社会がこれまで高く評価してきた価値観、例えば「重厚長大」なるものへの評価は、むしろ「軽薄短小」へと評価を変えつつある。いたずらに大きな組織より、小回りのきく小さな組織が評価される。マーケティングの分野でも、「大衆」は「分衆」へと変化し、これまでのように「人が着ているから自分も着る」といった考えでの流行商品は姿を消し、むしろ、「人が着ていたら、自分は着ない」ということである。またかつて美德とされた「仕事一筋」の価値観に代って、「仕事も遊びも」や、「遊びのための仕事」観がこれからは主流を形成するかも知れない。

このように、今日の私たちに必要なとされるのは、現象の底にある、目に見えない人間の心の変化、考え方の変化を、どう適切にとらえていくかということではなからうか。そしてそれをとらえたら、どう言葉で適切に表現していくかということではなからうか。私たちは、言葉で表現してはじめてその現象をよく理解できるからであり、他人にも、ひいては社会にも理解してもらえらるからである。

(2) 国際的な考え方の違いをとらえる

先ごろ、中曽根首相による「アメリカの知的水準」発言が、大きな波紋を広げた。これは二つのことを私たちに教えてくれる。一つは、良いにつけ悪いにつけ、日本の動向が注目されていること、二つは、そうだからこそ、我々の国際的な感覚が、よりいっそう練磨されなくてはならないということである。私たちは、世界には実に多様な価値観が存在すること、私たち日本人の論理が、つねに他に通じるという保証のないことをよく知らなくてはならない。有名なコマーシアルの文句ではないが、「違い」が判らなくてはならないのである。結婚式は神前、葬式は仏前、クリスマスは十字架の前ですます私たち日本人のやり方が、国際的にはむしろ例

外の部類に属することなどもよく認識しなくてはならない。

(3) 感性的な情報をとらえる

人間の脳は、右脳と左脳では働きが違う。左脳は論理を扱い、感性を扱うという。情報もこれと同じで論理的に整理できる情報と感性に頼る情報があり、道ゆくファッション情報などは、まさに後者に属するものである。原価千円のTシャツが、ちよつとしたマークや文字をプリントするだけで、何千円の価値をもつようになる。テレビとマンガにかこまれて育った「新人類」と呼ばれる若者たちは、この感性の面に優れた能力をもつといわれるが、こうした感性的情報をどうとらえるかも、これから大切な課題といえる。

(4) 「読み書き」能力の重要性の認識

これまでの論議は、どちらかというと社会の変る面にのみ注目してきた。しかし、変らないものもある。とくに、従来からの「読み書き」能力の重要性は、どんな時代になっても基本中の基本として評価されねばならない。これまで、情報を読みとる力、情報を表現し伝達する力の重要性を力説してきたが、その基礎にあるのは、なんといっても従来からの「読み書き」能力である。例えば本を読む能力だが、書物はいかなる時代にあつても、体系化された情報の宝庫である。一方、書く能力についていえば、情報活用の報告能力はもちろん、私たち人間は、書くことによつてあいまいな思考を明確にかつ体系的にすることができるのである。

(5) 必要な自己革新の意欲

情報社会に適応する新しい能力をつけねばならないのは、すべての世代に共通していえることである。変化する社会に適応するには、新たに必要とするものはどんどん吸収する一方、陳腐化した考えや技法はどんどん捨てて、能力の再編成に心がけねばならない。その場合、絶えざる自己革新、自己改造が必要であり、その決め手となるのは、各人の意欲であろう。

いかなる世代も、強い自己変革の意欲をもって、自らを広げる努力をしなければならない。その努力がないと世代間の共通部分はだんだんと狭くなってしまい、理解できるのは同じ世代の考え方だけということになる。それは情報化能力として、きわめて不十分なものでしかない。あらゆる世代が、世代相互間でも民族相互間でも、できるだけ多

くの共通項をもつよう努力すること、それが今日の社会における情報化能力を高めることであり、組織の社会的適応力を強めることでもある。つまるところ情報化能力の核心は、人間の理解であり、人間を理解しようとする人間の意欲なのである。

注

- (1) 山城章著 『経営基本』 同文館 一九七八年 P 38
- (2) 佐藤允一著 『問題の構造学』 ダイヤモンド社 一九七七年 P 7
- (3) 白井健作著 『文章トレーニング』 筑摩書房 一九八三年 P 138
- (4) 木下是雄著 『理科系の作文技術』 中央公論社 一九八一年 P 2
- (5) 矢矧晴一郎著 『情報化時代の人間思考』 日本放送協会 一九八五年 P 19

参考文献

- 桔梗 泉編 『最新ビジネス知識百科』 主婦と生活社 一九八六年
- 林雄二郎著 『情報化社会』 講談社 一九六九年
- 星野芳郎著 『情報化社会をどう生きるか』 ダイヤモンド社 一九八三年
- 大蔵省財政金融研究所編 『高度情報社会のパラダイム』 大蔵省印刷局 一九八五年
- 大蔵省財政金融研究所編 『ソフト社会の光と影』 大蔵省印刷局 一九八四年
- 長谷川慶太郎著 『情報化社会の本当の読み方』 一九八五年
- 有田恭助著 『情報の集め方』 光文社 一九六四年
- 川勝 久著 『情報整理学』 ダイヤモンド社 一九七〇年
- 井上 如著 『情報の読み方』 日本経済新聞社 一九七二年
- 梅棹忠夫著 『知的生産の技術』 岩波書店 一九六九年
- 中山正和著 『幹部のための考える技術』 日本能率協会 一九七〇年

金野 正編 『比較の発想』 日科技連 一九七五年
中山正和著 『文章表現の心得』 日本経済新聞社 一九七八年
山口博康著 『営業日報の戦略的活用』 一九八四年
坂川山輝夫著 『報告する技術』 ごま書房 一九八六年